


海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	岡田 倫明 
所属機関	京都大学消化管外科
・研究に従事した外国の研究機関名 ・参加した国際学会・会議名	フランス・ニース ヨーロッパ大腸肛門病学会 (European Society of Coloproctology)
渡航期間	自 平成 30 年 9 月 25 日 至 平成 30 年 9 月 30 日
・研究内容 ・国際学会・会議内容	Four-levels concept based on three-dimensional muscular structure to facilitate the understanding of surgical anatomy for anterior dissection in trans-anal ISR/APR of male.
研究成果 (要約 : 800 字)	
<p>低位直腸癌に対する経肛門的直腸間膜全切除術(taTME)に必要な手術解剖についてポスター発表を行った。Cadaver の組織・肉眼解剖と患者 MRI を対比して、肛門管周囲の精密な 3 次元画像を作成し、複雑な肛門管構造を解明・視覚化した。また、直腸肛門管を 4 つのレベルに分けて、内括約筋切除術(ISR)と腹会陰式直腸切断術(APR)の術式に沿って手術解剖を提示した。モロッコの外科医から、若手外科医や学生の教育に有用であると、また、韓国の外科医からは、発表を聞いて解剖の理解が深まったと評価をうけた。本研究は、大変意義のあるものだと実感し、情報を発信する大切さを学んだ。</p> <p>学会を通して、著名な外科医の講演を多数聴講することができた。低位直腸癌に対して術前放射線化学療法後に癌が見かけ上消失すれば経過観察を行う“Watch & Waite”の治療は特に興味深い内容であった。日本では、見かけ上癌が消失していても手術を行うことが定石であるが、“Watch & Waite”でも高い治癒率が得られることは、手術や人工肛門を回避でき患者には大きなメリットがあると感じた。日本でも、一つの治療選択肢として考慮する必要があり、日本人を対象とした臨床研究、エビデンス構築が必要であると感じた。また、直腸癌手術の合併症で問題となる縫合不全を回避する方法として、Pull through による 2 期的再建が見直されていた。術後の排便機能などまだ問題は残るが、術前放射線化学療法後や肥満など縫合不全のリスクが高い患者には考慮してもいいと思った。</p> <p>大腸・直腸癌に対する治療の最近のトレンドを網羅しており、短期間集中でとても勉強になった。日本と治療方針が異なる部分はあるものの、患者に最大のメリットが得られるようにうまく治療を取り入れていく必要があると思った。</p> <p>この度は、学会参加にあたりご支援いただきありがとうございました。</p>	